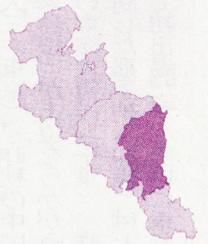


市民版



訪問カット ピース代表

赤松 あかまつ
隆滋さん (35) りゅうじ 伏見区



店員も連れて依頼先を訪れる日々だ。

「今日はどんな感じにしましようか」。にこやかに客に話しかける。「横はふわっとした感じに」「この前より少し短めにしてください」。リクエストに笑顔でうなずく。訪れた先は機材類がそろったヘアサロンとは違う。はさみを握ったり、「お客さまがしんどくならないよう」数十分間の真剣勝負だ。病気や高齢、障害などで理美容室に行けない人のた

め、自宅や福祉施設などを訪れてカットするサービスを2008年に始めた。普段は店長を務めるヘアサロンで働きつつ、休日の月曜は別の店の子どもたちの髪を切るよう



訪問カットで、就職活動に向かう失業者の髪を整える赤松さん

「おしゃれ楽しんで」家や施設へ

出歩けない人の元へ出向く訪問カットを始めたきっかけは、同じ店で働く後輩の「おばあちゃんを喜ばせる仕事があった」という一言だった。高齢者施設で訪問カットサ



訪問カットでは、個人宅に一人で行くことも。そんな時は小回りのきくバイクに機材を積んで駆けつける(京都市伏見区)

ビスを始めた。「おじいちゃんみたいな髪形のおばあちゃんもいた」。やがて「コミで障害者施設からも依頼を受けるようになった。みな丸刈りか角刈りだった。多少お金がかかってもいい。彼らに「おしゃれを楽しんでほしい」という施設職員の言葉に素直に共感した。

雇用が悪化した今は失業者の施設も訪れ、再就職の面接に向かう人の髪形を整えることもある。「身だしなみを整えて再スタートを切って」と思いを込める。

多い時は訪問カットのメンバー4人で、1日に40人カットすることも。「へとへとになる時もある」

きれいな仕事ばかりの仕事ではない。客から突然「切りたくない」と怒られたり、雑談していて後ろ向きなことを言われることもある。落ち込むこともある。でも、「日々勉強」といい、始めたことはやり遂げようと心に決めている。

(山田修裕)